学校の教育的環境整備に教頭としてどのように関わるべきか

―業務改善の推進と生徒の資質・能力の向上を目指して―

鹿児島県鹿児島市第４ブロック教頭会　鹿児島市立河頭中学校　　田　島　久　仁

１　主題設定の理由

業務改善の推進と生徒の資質・能力の向上は喫緊の課題である。学校における働き方改革は、教育基本法や学校教育法に定められた教育や学校の目的に基づく目標を達成するために行われる必要がある。その主となる目標が、「やりがい」ある豊かな教師人生の構築と生徒の資質・能力の向上であることは忘れてはならない。

本ブロックに所属する６中学校は、On Line（デジタル）とOff Line（アナログ）のバランスを意識しながら、それぞれの学校の強みを生かした実践を進めてきている。そこで、それらの実践において、教頭としてどう関わることで教育的環境の整備を前進させるかについて研究し、前述した課題の解決を目指すことにした。

２　研究のねらい

最初に研究主題と副主題に基づいて、各校の特筆すべき実践を以下の２項目に分けて整理した。

(1)　業務改善の推進に向けた教育的環境整備
(2)　生徒の資質・能力の向上に向けた環境整備

次に、それらの実践の成果と課題を明らかにし、本年度の研究実践につなげていくようにすることを大きなねらいとする。

３　研究の経過

コロナ禍による影響も踏まえ、本年度に研究が深められるよう、以下のように進めた。

(1)　研究主題や副主題、内容等の検討と確認
(2)　各校における取組の推進及び情報交換
(3)　評価（成果と課題）についての協議
(4)　次年度の研究実践内容の確認

４　研究の概要

(1)　業務改善の推進に向けた教育的環境整備

ア　FHR（附属中学校応援団募集）の設立

Ａ校では、学校の教育方針に基づいて、保護者のFuzoku Human Resources Bank "FHR"への登録を依頼し教師の業務負担を軽減している。

応募型、依頼型、しかけ型といった登録の３つのタイプを設定し、その案内や集約を教頭が中心的に担うことで、学年部の負担を軽減することにつなげている。

また、取組の事前打合せでは学校教育目標を基に生徒に育みたい資質・能力を保護者と共有し、カリキュラム・マネジメントとしての内・外リソース活用効果を高めている。

イ　Teamsを活用した全校朝会

Ｂ校では、業務改善の取組として各教室のテレビモニターを活用した全校朝会を実施している。体育館へ移動することがなくなり、落ち着いた学校のスタートを切ることができている。また、健康観察等、ゆとりをもって朝の学級の様子が把握できている。

教頭としての関わりは、視聴覚教育担当職員、生徒会担当職員及び教務主任との連絡調整や必要な機器の準備、確認である。また、各学級でのタブレット等の準備、映像や音声の確認等を生徒が主体的に行えるように生徒会担当職員や視聴覚担当職員を中心に連絡・調整させることによって、職員の関与性や協働性も高まり、全職員が関わることにつながっている。

ウ　See Smileを活用したペーパーレス化

Ｃ校では、本年度より鹿児島市公立学校校務共通システム（See-Smile2）を利用して、ペーパーレスの職員会議や職員研修を始めた。業務改善の視点での取組と生徒・職員共通の努力点である「ゴミの量を減らし、リサイクルを推進します」の取組強化を兼ねるものとして、教頭が提案したものである。

ICT機器の活用によるデータの共有で、提案事項や研修内容の共通理解・共通実践につなげ、印刷・製本といった会議・研修資料作成時の業務を軽減することと、紙資

源・費用の有効活用を目標としている。

Ｃ校は少人数の学校であるがゆえに、職員一人あたりが担当する校務分掌の数が必然的に多くなる。教頭として、校務の効率化を推進するにあたり、その第一段として職員会議・研修におけるペーパーレス化を提案、その推進を行っている。

(2)　生徒の資質・能力の向上に向けた教育的環境整備

ア　生徒の多忙化解消から業務改善

Ｄ校では、あらゆる場面で生徒の主体的で、自治的な活動を促進し学校の在り方を大人とともに考える仕掛けをしてきた。一方で、学校における「業務改善」に取り組む過程で生徒に「効率化」の視点をもたせて活動の改善について考えさせることが真の「業務改善」につながるのではないかと考えた。また、それを生徒にルーブリック表をもたせて、日頃から意識させている資質・能力を伸ばす機会にすることにした。

そこで、「教育課程運営委員会」に参画させることとした。構成員は、校長、教頭、教務主任、教務補佐、学年主任で、生徒は生徒会役員が中心に参加できるようにしている。これまでに生徒は、「充実した活動には多忙感がない。」「意義が伝わらないと多忙感がある。」ことに着目している。今後更に回を重ね、課題発見の力や協働する力を育てていきたい。

イ　縦割無言清掃の充実に向けて

Ｅ校では、「縦割り無言清掃」に取り組んでおり、三学年縦割りグループでの清掃により社会生活への適応力の育成や生徒の自主的な取組を促すとともに、我慢する心、思いやりの心、気付く心の育成を図っている。

これまでの取組のなかで縦割り無言清掃の意義や目的、方法を十分に理解している生徒と理解していない生徒との活動の差が生じていた。

そこで教頭として、担当職員を中心に、全職員で縦割り無言清掃における共通理解事項を全職員で再確認した。また、生徒会専門部の担当職員に働きかけ、学級での呼びかけを行うようにした。さらに、リーダー育成を図るため専門部長、副部長を通して各学級の班長、副班長が灌水活動を行う取組も始めた。

ウ　総合的な学習の時間と内外リソースの活用

Ｆ校では、外部のリソースを積極的に活用することを続けている。それは生徒の社会的な課題への理解をより深めることができ、業務改善にもつながる。専門的な指導は専門家に任せて、教師はファシリテーター役となることで、教師の負担を軽減し、教育活動が質的にも向上すると考えた。

そこで、１年生での自然体験学習や２年生の福祉学習では、専門家を招いた講話により関心を高め、理解を深めている。また、３年生の職場体験学習の発表会に２年生も参加させることで、発表内容の質的向上と働くことへの関心を高めることができている。さらに、体験学習の成果を文化祭の中で展示や舞台発表として表現させる機会を設けたことで、まとめ活動にも積極的に活動するとともに、保護者や地域住民の前での発表が達成感や充実感につながっている。

教頭の関わりとしては、担当職員の引継の際に積極的に声を掛け、外部機関との連携や資料作成のサポートをしている。また、取組や成果を学校だよりやホームページ、学校評議員会などで公開し、その反応を還元して生徒・職員の意欲を高めている。

5　研究の成果と課題

(1)　成果

ア　保護者の理解が深まり、職員の関与性や協働性が高まってきている。また、負担軽減につながった。

イ　生徒の学びや身に付けた資質・能力を生かし伸ばす実践の場とすることができ、リーダー性や協働性が高まった。また、主体的な動きが見られた。

(2)　課題

ア　教育課程への位置づけを明確にし、職員や生徒に研修等を計画的に行う必要がある。教頭自身の負担軽減も意識したい。

イ　生徒が自分の意見が率直に言える工夫や消極的な生徒への関わり方の工夫が必要である。また、情報発信にも努めたい。